

有本真紀 / 阪井恵 / 津田正之 編著  
『新版 教員養成課程 小学校音楽科  
教育法』

教育芸術社 2019年224頁1,800円(税抜)

老本桃子 (立教大学)

本書は小学校学習指導要領(平成29年告示)の改訂を受け、前作である『2011年改訂版 教員養成課程 小学校音楽科教育法』(教育芸術社2011年)に加筆修正を施したものである。本書の内容を紹介する前に、まず新学習指導要領の改訂のポイントについて触れておきたい。

新学習指導要領における新たなキーワードの一つとして、「見方・考え方」を挙げることができる。この言葉は全ての教科等の目標に組み込まれており、各教科等の資質・能力を育成するために必要なものであるとされている。音楽科において育成を目指す資質・能力は「生活や社会の中の音や音楽と豊かにかかわる資質・能力」であり、そのためには「音楽的な見方・考え方」を働かせる必要があることが示されている。

従来の学習指導要領と比較すると、今次の改訂では目指すべき目標や指導すべき内容がより一層明確になっていると言えよう。しかしながら「音楽的な見方・考え方」の説明にある「音楽に対する感性」とは何か、また目標にある資質・能力を育成するためには歌唱について具体的にどのように指導すべきか等は明示されていない。本書にはこのような疑問点を含め、新学習指導要領に関する解説や指導の際の留意点等が、包括的かつ具体的に示されている。以下より、その内容と特色について述べていく。

本書は「教育法研究」(第一部)と「教材研究」(第二部)からなる二部構成となっており、巻末には付録として日本の音楽教育の歴史や基本的な楽典、そして学習指導要領等が掲載されている。はじめに第一部について取りあげる。

第一部の冒頭部分では「そもそも何故、学校教育において音楽を学ぶ必要があるのか」という問いが掲げられている。学校における音楽科の存在が当た

り前になった今日では、このような問いについて考えたことがないという人も多くいるのではないだろうか。第一部は教育法研究の出発点として、この問いに対して様々な視点から考察するところから始まる(I 小学校音楽科の意義)。

第一部の前半部分では、新学習指導要領において新たに定められた目標に向かうための指導方法が、実践事例と共に具体的に示されている(II 小学校音楽科の目標と内容)。ここでは教師と児童とのやりとりの例やそこで予想される児童の反応等がイラストによってまとめられており、状況を想定しやすいように配慮された構成となっている。後半部分では、前半で示されていたような授業を計画的に行うための「学びの地図」として、学習指導案が取りあげられている(III 学習指導計画の作成)。一般的な指導書で目にするような学習指導案の作成例だけでなく、学習指導案に組み込むべき基本的な項目とその注意点がリストとしてまとめられており、教師を目指す学生はもちろんのこと、既に教師として音楽科の授業を担当している人にとっても有用であると言えよう。

作成した学習指導案をもとに授業を行う前に、もう一つ考えなければならないことがある。それは「小学校において音楽の授業を行うにあたって、最も必要な力とは何か」という問いであり、その答えこそが第二部の教材研究である。本書は教材研究の重要性について、以下のように述べている。「限られた音楽科の授業の中で、どんな音楽を、どのように児童に出会わせることができるかは、全て教材選択と、教材研究にかかっている」(本書 p.98)。音楽科はその性質上、他の教科等と比べて教材研究が難しいと言われている。本書はそうした教師の悩みに応え、音楽科における教材研究の方法について、基礎から丁寧に例示している。歌唱教材は楽譜だけでなく、詩としてとらえやすいように縦書きの歌詞も添えられている。また器楽教材や鑑賞教材も収録されており、教材選択のヒントとなる情報が数多く提示されている。

本書は、学習指導要領の改訂や音楽科の性質等によって教師が抱える悩みに丁寧に寄り添いつつ、小学校の音楽科について、理論と実践の両方の内容が豊富に盛り込まれている一冊であると言える。